

これまで、『なんとなく』、『クリスタル』を何度読んだだろうか。その度に、最初に読んだ時のショックを思い出す。これは、ほんとうに、ほんとうにすごい小説だ。そのことを、これから初めて読む人たちにわかってもらえると嬉しい。もちろん、そのために必要なのは、解説ではなく、ただ素直に読むことなのだけだ。

『なんとなく』、『クリスタル』は一九八〇年に、雑誌「文藝」に、第十七回の文藝賞受賞作品として発表された。たちまち大きな話題となり、単行本として発売されてからはミリオンセラーとなった。一つの小説、あるいは文学作品という枠を超え、「社会現象」とさえなった。この作品の評価をめぐる、意見は割れた。多くのふつぎの読者にとっても、あるいは専門家と称する人たちもまた、どちらかというと、悪評の方がずっと多かったのではないかと思う。

主人公のモデルもしている女子大生は、最新の（というか、自分の趣味とセンスで選んだ）ファッションを身にまとい、新しいスポーツに出没する。同棲（ではなく共棲）している年上のボーイフレンドもまた、新しいジャンルの音楽で生きる若者だ。彼らの生活の回りには、夥しいブランド、レストラン、音楽が蠢いている。それらのほぼすべてに詳細な注をつけた、この小説は、その時代に出現したばかりの、若者たちの新しい価値観を描いているように見えた。そして、この小説を批判した人たちの多くは、この若者たちの、「なんにも悩みなんでなく暮らしている」「なんとなく気分がよいものを、買ったり、着たり、食べたりする。そして、なんとなく気分がよい音楽を聴いて、なんとなく気分がよいところへ散歩しに行ったり、遊びに行ったりする」そんな「クリスタルな生き方」の空虚さを批判したのである。

そういった批判は、的はずれだった。なぜなら、『なんとなく』、『クリスタル』は、そもそも、そんな「クリスタルな生き方」を称揚するといった小さな目的のために書かれた小説ではなく、実は、「文学そのものを批判」する小説だったからである。文学関係者、あるいは、「文学が好き」と「なんとなく」思いこんでいる読者たちの怒りをかっつたのもそのためだったのだ。

235 解説

そもそも、『なんとなく』、『クリスタル』は、どう読めばいいのだろうか。高級な意味でいっているのではない。この小説は、具体的な意味で、読み方がわからないので

ある。ご覧になればわかるように、この小説の最大の特徴は、左側の頁に置かれた、本文よりも長大に感じられる無数の注だ。まず右側の本文を読み、それを読み終えて後、左側の注に移動する。なるほど、そういう読み方もあるだろう。あるいは、右側の本文を読みながら、該当する注のところ、一々視線を走らせる。あるいはまた、一気に最後まで（あるいは、かなりのところまで）本文を読み、また元に戻って、注を読む。それが正しいのか、それとも、どのように読んでもかまわないのか。

ぼくは、そのすべてを試してみた。そして、不思議なことに気づいた。ここには二つの異なった小説が存在しているのである。一つは、ひとりの、一九八〇年前後の社会を浮遊する女子大生の生活を描いた、「本文」らしい小説。そして、もう一つは、「注」という名のついた、鋭くも強靱な批評の形をした小説だ。この二つの小説は、片方が「本文」で、もう片方が「注」という名の従属した部分、ではなく、どちらも対等な、異なった作品として存在している。いや、ほんとうにそうなのだろうか。ぼくは、繰り返し、この不思議な小説を読みながら、ついには、女子大生の物語の部分、いわゆる「本文」とされる部分こそが「注」であり、「注」とされる部分こそが、この作品の「本文」なのではないか、とさえ思うようになったのである。

主人公の女子大生の束の間のアバンチュールの相手である大学生の「正隆」は、こういう。

「クリスタルか……。ねえ、今思ったんだけどさ、僕らって、青春とはなにか！ 恋愛とはなにか！ なんて、哲学少年みたいに考えたことってないじゃない？ 本もあんまし読んでないし、バカみたいになって一つのことを熱中することもないと思わない？ でも、頭の中は空っぽでもないし、曇ってもないよね。醒め切っているわけでもないし、湿った感じじゃもちろんないし。それに、人の意見をそのまま鵜呑みにするほど、単純でもないしさ。」

そして、「本もあんまし読んでないし」につけられた「注」は、このように書かれているのである。

「いくら、本を読んでいたら、自分自身の考え方を確立できない頭の曇った人が一杯いますもの。本なんて、無理に読むことないですよ。」

簡単にいうなら、「近代文学」とは「青春とはなにか！ 恋愛とはなにか！」と考えることだった。そのように考える者たちの物語が「文学」だった。そして、「文学」は、そのような本を読むことで、「自分自身の考え方を確立できる」と教えてき

たのである。

だとするなら、ここにあるのは、「文学」という形をとった「文学批判」なのではないだろうか。

いまから三十三年前、『なんとなく、クリスタル』を初めて読んだ時、ぼくは、二つの矛盾する感想を抱いた。それは、まず、こんな小説はそのまま一つも読んだことがない、というものだった。もう一つは、けれども、このようなものをどこかで一度読んだことがある、というものだった。そして、ぼくは気づいた。この感想はどちらも正しいのだ。なぜなら、このような小説はそのまま読んだことがなかったが、このような本なら読んだことがあったからである。

それは、カール・マルクスの『資本論』だ。

マルクスの『資本論』は、ぼくたちが生きている世界、資本主義社会の経済を徹底的に分析しようとした最初で最大の本だ。だが、マルクスは、『資本論』を「経済学」の本とは考えなかった。彼は、『資本論』を「経済学批判」の本と考えたのだ。それまでのすべての経済学者たちは、資本主義社会を「解釈」しようとしてきた。「経済学」とは、そういうものだった。そのことを疑う者はいなかった。だが、マル

クスは違った。「経済学」が、目の前にある社会の仕組みを「解釈」するだけなら、そんなものは要らない。必要なのは、それを「変える」ことではないのか。だとするなら、自分が書くものは「経済学」の本ではなく、「経済学批判」の本なのだ、と。

その特徴は、『資本論』における「本文」と「注」の関係にある。右側の、この社会の仕組みを冷静に「解釈」する「本文」に対し、左側の「注」では、その実例が熱をこめて語られるのだ（たとえば、「それでなくてもこの抵抗は、機械による労働の容易に見える外観と、従順な婦人児童要素とによって、減らされているのである」という「分析」には、ある工場監督官の「婦人労働者の中には、何週間も続けて、わずかに数日を除けば二時間以下の食事時間で、朝の六時から夜中の一二時まで働かされる婦人があり、かくして、彼女らにとっては週のうち五日間は、家への往復とベッドに休むために、一日の二四時間のうち六時間しか残らない。」といったことばが「注」としてつけられる、といった具合に）。

『なんとなく、クリスタル』の最後は、「本文」でも「注」でもなく、まるで放り出されるように、「人口問題審議会『出生力動向に関する特別委員会報告』と「五十四年度厚生行政年次報告書（五十五年度版厚生白書）」が置かれている。そこでは、合

計特殊出生率として一九七五年 \parallel 一・九一人、一九七九年 \parallel 一・七七七人の数字と「出生率の低下は、今後もしばらく続くが、八十年代は上昇基調に転ずる可能性もある」ということばが併置されている。ちなみにこの予想は外れ、出生率は一九八七年に「一・七」を、一九九二年に「一・五」を、二〇〇三年に「一・三」を切った。また「(六十五歳以上の)老年人口比率」に関して「一九七九年 八・九%」「一九九〇年 一一% (予想)」「二〇〇〇年 一四・三% (予想)」は現実には「二〇〇〇年 一七・四%」「二〇一〇年 二三・〇%」であり「二〇二〇年 二九・一%」「二〇六〇年 三九・九%」と予測されている。

政府の(楽観的な)予想は外れ、いまこの国は、誰にも予測できない不安な未来へ向かいつつある。「なんとなく、クリスタル」は、社会が異様な繁栄へ向かいつつあるその瞬間に、まるで悪夢のような光景を一瞬、垣間見させた。だが、人びとは、その映像には気づかなかつた。著者の田中康夫だけが提出することができた、世界の荒涼たる未来の風景を見なかつたことにした。この小説が持っている、もっとも恐ろしい、幻視する力には気づかぬふりをしたのだ。

このような小説は、過去にもなく、これからもないだろう。これほど深く、徹底的に、資本主義社会と対峙した小説を、ぼくは知らない。マルクスが生き延びていたら、

彼が『資本論』の次に書いたのは、『なんとなく、クリスタル』のような小説ではなかつたらうか。